第６課　神の印を押された人たち

【暗唱聖句】

「そこで、わたしが、「わたしの主よ、それはあなたの方がご存じです」と答えると、長老はまた、わたしに言った。「彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」黙示録7：14

【日曜日・風を抑制する】

「この後、わたしは大地の四隅に四人の天使が立っているのを見た。彼らは、大地の四隅から吹く風をしっかり押さえて、大地にも海にも、どんな木にも吹きつけないようにしていた」黙示録7：1

今4人の天使が大地の四隅に立ち四方から吹く風を押さえています。風は旧約聖書の中では神様の悪人に対する裁きを下すときの破壊的な力を象徴しています。この4人の天使の手が解かれたとき、世の終わりに起こると予言されている様々な出来事が起こります。

「その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます」第二ペテロ3：10

「神の天使たちが人間の激情の激しい嵐を抑えるのを止めると、争いの諸要素がことごとく解き放たれる」（各時代の大争闘したP386）

天使が押さえていた風が解かれると、人間の悪から生まれる激情が押さえがきかなくなり、争いが起きてきます。そして今まで起きたことがないような天変地異が起こります。しかし、今はまだ四方から風が吹き荒れないように天使がとどめられています。これには理由があります。

「わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけてこう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない。」黙示録7：2、3

もう一人の天使が神の僕たちの額に生ける神の刻印を押しています。それが終わるまで風はとどめられています。神の印が押されるとは、救われるべきものたちが神様のものであることが確かにされることを象徴しています。そして、最後の神の裁きの災いから守られます。これは旧約時代にも同じことが起こりました。

「主は彼に言われた。「都の中、エルサレムの中を巡り、その中で行われているあらゆる忌まわしいことのゆえに、嘆き悲しんでいる者の額に印を付けよ。」また、他の者たちに言っておられるのが、わたしの耳に入った。「彼の後ろについて都の中を巡れ。打て。慈しみの目を注いではならない。憐れみをかけてはならない。老人も若者も、おとめも子供も人妻も殺して、滅ぼし尽くさなければならない。しかし、あの印のある者に近づいてはならない。さあ、わたしの神殿から始めよ。」彼らは、神殿の前にいた長老たちから始めた」エゼキエル書９章４～６節

裁きのとき、その災いに巻き込まれないために、神は神の子たちに印を押していくのです。そして、気をつけなければいけないのは、神の印は決して努力して勝ち取るものではなく、神の恵みによって与えられるものだということです。

また、風が押しとどめられているもう一つの理由は、神様は一人も滅びないで悔い改めるのを忍耐して待っておられるからです。

「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」第二ペテロ3：9

神の印が押される者たちの特徴は忠実であることです。最後の危機に際しての忠実さにおいては、特に安息日が試金石になるでしょう。旧約聖書において国が滅びていった背景に神の民の印として安息日問題があったのと同様です。

「また、わたしは、彼らにわたしの安息日を与えた。これは、わたしと彼らとの間のしるしとなり、わたしが彼らを聖別する主であることを、彼らが知るためであった。しかし、イスラエルの家は荒れ野でわたしに背き、人がそれを行えば生きることができるわたしの掟に歩まず、わたしの裁きを退け、更に、わたしの安息日を甚だしく汚した。それゆえ、わたしは荒れ野で、憤りを彼らの上に注ぎ、彼らを滅ぼし尽くそうとした」エゼキエル書 20章 12、13節

いま、天使が風を押さえている間にわたしがすべきことについて以下のように教えられています。

「このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです・・・きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい」第二ペテロ3：9～14

【月曜日・神の印を押された人たち】

「わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた」黙示録7：4

黙示録7：4になると刻印が押された人々の数が出てきます。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から刻印が押されています。十四万四千人という数字は、神の民の数字である12（12部族、12使徒）がかけられていることがわかります（12×12×1000）。また12部族は今日すでに存在していないことや旧約聖書の12部族と違っている（レビ族、ヨセフ族、ダン族、エフライム族がない。ユダ族がルベン族の代わりに最初に来ている）ことなどから、この数字は象徴と考えられます。ダン族とエフライム族が抜け落ちたのは、この二つの部族が背教的で不忠実であったからだと考えられます。十四万四千人に象徴された人々は、忠実な神の民たちであり、忍耐をもって最終時代を生き抜き、生きたまま再臨を迎えることになるでしょう。

【火曜日・大群衆】

「この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ。「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである」黙示録7：9，10

ヨハネは神の印が押される特別な人たちの数を耳にした後、今度は数えきれないほどの大群衆が白い衣を身に着け、神様を賛美しているのを見ます。この人々は誰なのでしょうか。7章14節を見ると「彼らは大きな苦難を通って来た者で、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」と書かれてあります。単に救われた人々ではなく、大きな苦難を通って来た者とあることから、再臨直前の大きな苦難を生き残った十四万四千人のことではないかと考えることができます。ヨハネは最初に人数を耳で聞き、次に目でその人たちを見たと考えるわけです。また、大きな苦難を通って来たのは再臨前の人々だけでなく、あらゆる時代においても大なり小なり苦難は常にあったわけですから、時代を超えた救われた者たちすべてを象徴していると解釈することもできるでしょう。いずれにしても、苦難の中にあっても信仰を捨てることなく、キリストに対する信仰のゆえに、その衣を小羊の血で洗って白くされた人たちです。そして、いまどれほど多くの困難の中にあったとしても、やがて天の御国において、白い衣を着て神様を賛美することになることを大きな希望とすることができます。

【水曜日・子羊に従う者たち】

14:1 また、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っており、小羊と共に十四万四千人の者たちがいて、その額には小羊の名と、小羊の父の名とが記されていた…14:3 彼らは、玉座の前、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌のたぐいをうたった。この歌は、地上から贖われたの者たちのほかは、覚えることができなかった。14:4 彼らは、女に触れて身を汚したことのない者である。彼らは童貞だからである。この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、14:5 その口には偽りがなく、とがめられるところのない者たちである」

十四万四千人の特徴は、①女に触れて身を汚したことのない者、②小羊の行くところへは、どこへでも従って行く③その口には偽りがなく、とがめられるところのない

女に触れて身を汚したことがない者とは、他の偶像の神々を拝むことをしないという意味です。神様以外のものに心が奪われてしまうことがなく、主に対して常に忠実です。だから、キリストの行くところへはどこへでも従って行くのです。そのような者たちの口には偽りがなく、とがめられるところがありません。

彼らは座の前、また四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌のたぐいを歌います。この歌は地上から贖われたの者たちのほかは覚えることができなかったと書かれてありますが、本当に贖われた喜びを知らない人は、心から歌うことができないということでしょう。十四万四千人の描写は「神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける」（黙示録14：12）最終時代の残りの民の特徴とも一致します。また、「この者たちは、神と小羊に献げられる初穂」とあるのは、死を見ることなく天に挙げられる特別な民だからでしょう。

【木曜日・救いは神と子羊のもの】

「その口には偽りがなく、とがめられるところのない者たちである」黙示録14:5

「だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけるように励みなさい」第二ペテロ3：14

「あなたがたを罪に陥らないように守り、また、喜びにあふれて非のうちどころのない者として、栄光に輝く御前に立たせることができる方、 わたしたちの救い主である唯一の神に…」ユダ24，25

十四万四千人の特徴である「その口に偽りがなく、とがめられるところのない」というのは、目指すべき努力目標ではなく、そのような状態に作り変えられていると理解すべきです。もちろん、わたしたちはそのために励まなければなりませんが、その努力が実るというよりも、そのように生きている者たちを主が愛のうちにそのように作り変えてくださるということです。逆に言えば、そのように生きたいと願わないのなら主の変革の力が働くこともないのです。